

---

# エデンの檻～次元の旅人が来た世界～

ジンオウガ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エデンの檻／次元の旅人が来た世界／

### 【NZコード】

N2597BA

### 【作者名】

ジンオウガ

### 【あらすじ】

もしも如月拓海が次元の裂け目に落ちないで『エデンの檻』の世界に来たらの物語。拓海はこの世界で一体何を見るのか……。そして、無事にアキラ達の運命を変える事が出来るのか!?

## 第1話『始まり』

拓海

「此処が次の世界……確かに『エーテンの檻』だったよな？」

エーテンの檻の世界に着いた如月拓海はそう言つて周りを見渡していた。この世界の舞台である無人島には大昔に絶滅した動物達がいた。今拓海の肩や頭に乗つて甘えてくる約6500万年も前に絶滅した動物でリストのような存在だったと考えられている『ブティロドウス』もその一匹だ。

拓海

「どうするかな？実際に俺はエーテンの檻は一巻辺りしか見た覚えが無いんだよな、まあとりあえず、人を探して見るか」

拓海はそう言つてブティロドウスを撫でながら森を進むことにした。そして、歩くこと約数分。拓海は前に『トリロ』の世界で大量に貰つた食材が入つたグルメケースの一つに入つていたホワイトアップルがかじりながらこの世界の重要人物達を探していた。ちなみにブティロドウスはまだ拓海の肩や頭に乗つていて、時々拓海はブティロドウス達にホワイトアップルの切り身を与えていた。

拓海

「うーーん…只でさえ馬鹿にデカい島だからな、これじゃ何時見つかるのやらーーー」

——オーケイ、オーケイ……—

拓海

「人の声？…………いや、もしかしたら」

拓海は聞こえてきた人に似た声のした方に走つてみた。そして、森を抜けそこにいたのは巨大な鳥にして恐竜が絶滅した直後に繁栄した恐鳥種の絶滅種『ディアトリマ』がこの世界の主人公達を襲おうとしていた。拓海はすぐさまディアトリマに向かつて走り、ボストンバッグからトリコの世界で買った動物をノッキングする道具『ノッキングガン』を取り出す。

拓海

「ノッキング！！」

バシュンッ！

ディアトリマ

「クエ！？…………クエヒ…………」

ドサッ！

ノッキングされたディアトリマはそのままドサッと倒れて痙攣した。そして、拓海はノッキングガンをボストンバッグにしまうと3人の方を振り向く。

拓海

「大丈夫か？」

アキラ

「あ、ああ。助けてくれてありがとう。俺は仙石アキラ。こっちのメガネを掛けてんのは真理谷四郎でこの人が……えーと？」

夏奈子

「さ、キャビンアテンダントの大森夏奈子です。助けてくれてありがとうございますー！」

拓海

「どう致しまして。なんとか間に合って良かったよ」

拓海はそう言つてはいるが、真理谷はティアトロマを見た後、拓海に聞いてきた。

真理谷

「……こいつは、殺したのか？」

拓海

「いや、殺してはいない。只単にそのティアトロマを動かないようにしてだけ。数時間もすれば勝手に解ける」

アキラ

「ティアトロマの鳴の事か？」

真理谷

「ティアトロマだとー?まさかー」

拓海

「そう、今から約5000万年前に絶滅した絶滅動物だ」

拓海がそう言つと3人は驚いていた。

拓海

「ティアトロマだけじゃない。今俺の肩に乗つているプロドウ

ス達や向ひの森にいた200万年前に絶滅した『コメガミス』や3500万年前に絶滅した『ヒラコテリウム』もいた。そして、この島は地図にも乗っていない……存在しない島だ

これが、拓海とアキラ達の始まりの出会いだった。

## 第2話『探索』

あれから拓海はアキラ達と共に夜が明けてから落ちた飛行機を探すためジャングルの中を歩いていた。

アキラ

「誰かーーー！いませんかーーー！おおーーー！誰かーーー！おい、お前ら元気ねえぞー！もつと声出せー！」

真理谷

「…………僕は…………理系の人間だ…………体力馬鹿のお前と一緒にするな…………！」

夏奈子

「そ…………そーですよ。ハア…………ハア…………昨晚はよく眠れませんでしたし…………少し休みましょうよ…………」

アキラ

「ああーーー！だらしねえぞー！てめーーー！」

拓海

「いや、少し休憩した方が良いぞ。何時、ディアトロマみたいな奴が現れたら逃げる為の体力がなくなるからな」

アキラ

「うつ、拓海さんがそう言つたりやうするぢ

拓海に言われたアキラは了解し、全員休むことにした。ちなみに、何故アキラは拓海をさん付けで呼ぶのは年が拓海の方が上だからら

しい。休む3人に拓海はボストンバッグに入っていたアクアウォーターアの入ったペットボトルを渡す。

拓海

「はい夏奈子さん。コレ飲んで一休みしてください」

夏奈子

「あ、ありがとうございます。それにしてもそのボストンバッグ、色々入っていますね」

アキラ

「確かに、昨日だって寝袋や小型ガスコンロとインスタントコーヒー1袋」

真理谷

「更には閃光玉やスマートグレネードにサバイバルキット、更には最新型のノートパソコンやらなんやかやとは、一体どんな仕組みになっているんだボストンバッグ」

拓海

「企業秘密だ。ちなみにこの中には食材や飲み物に調味料も入っているからな」

アキラ

「凄すぎるだろそれ……」

アキラはそう言って苦笑いをした。

拓海

（でも、流石に今現在で鍊金術や魔法を使う訳にはいかないな。こ

れはいざとこづ野に使つとして、使える武器は俺の斬魂刀とノックングガンだな）

拓海はそう思つてゐるとテイロドゥス達は拓海から夏奈子の方に乗り移る。

夏奈子

「ひゃあ！？……あれ？なんか可愛いかも……」

拓海

「はは、夏奈子さんの事が気に入つたんでしょう……ん？」

拓海は笑いながら夏奈子を見つめると、森の奥から何かが近づいてくる気配を感じとり、立ち上がる。そして、現れたのは昨日のとは別のティアトロマだつた。

アキラ

「ティアトロマ！？また『イツカ！？』

拓海

「いや、それだけじゃなにらっし……」

夏奈子

「え？ビリヒ……ヒーーー？」

拓海はティアトロマのこぬ所とは別の方を向いてるのでアキラ達は拓海の見ている方を向くとそこには一万年前に絶滅した猫科肉食獣『スマロドン』がいた。

真理谷

「バカな…アレはまさか…！？」

アキラ

「サーべルタイガー！？」

アキラ達がそう言つていると2匹は拓海達を挟むようにして、先に動いたのはスミロドンの方だった。

アキラ

「来たああああ！！」

拓海

「3人共…しつかり掴まつてろよ！」

真理谷

「な、何をあ！？」

夏奈子

「え？ウヒヤアッ！？」

拓海は素早く3人を掴むと、その場からジャンプして避ける。

アキラ

「と、飛んでるううううう…！」

そして、そのまま着地した拓海はその場から急いで離れる。

拓海

「！」のままあの2匹から離れるから、しつかりしがみついていろ…」

夏奈子

「は、はい！」

真理谷

「俺達3人を抱えているのになんていうスタミナだ。どんな体をしているんだこの男は」

真理谷の言葉にアキラ達は心の中でそう思っていた。

その後、あの場から離れた4人は川辺の近くに匂いを作り、そこで夜を過ごしていた。拓海は夕飯を作るためボストンバックから必要なグルメケースを何個か取り出して作り初めていた。

真理谷

「やつぱり有り得ない。サーベルタイガー、正式には『スミニロドン』だが、一万年も前に絶滅した筈だ……」

アキラ

「またその話かよ真理谷……ショーゲねえだろ。いるもんはよー」

真理谷

「いくらバカでもいい加減理解しろー」この事態の深刻さを……

アキラ

「そ、そんなこと言つたつてどうすりやいいんだよーそれより早くみんなを探して……」

夏奈子

「どうせ死んりますよ。みんな……私たちだってその内に食べられて……」

夏奈子がそういひと全員黙りこむ。

アキラ

「バ…バカ言つてんじゃねえよ…すぐに救助だつてきてーー」

夏奈子

「救助が来るまで私たちが生きてる保証があるんですか！？無責任な事言わないで…！こんな島から生きて出られる筈ないじゃない！…もう帰れないんですよ…私たちは……！」

アキラ

「…………ツ」

そう言つ夏奈子に言葉を失いまた沈黙が続くが、その沈黙を拓海は破つた。

拓海

「はいはい…そういうがみ合つていない…今飯が出来たから食べろー…」

夏奈子

「こんな時になんであなたはそつ冷静でいられるんですか…？」

拓海

「とにかく食え。そんなに叫んでると腹が減るぞ…ほらほら…冷めない内に早く食べろって！」

そう急かされたアキラ達は渋々座り拓海が紙皿に添えた焼き肉を食べた瞬間、3人は顔を変えた。

アキラ

「な、なんだこの肉……めぢやくぢや美味しいー！」

真理谷

「普通の牛肉よりも濃厚、だがそれでもじつはくない味わいー！」

夏奈子

「この肉は初めて食べましたよー！」

拓海

「ホレ！米も炊けてんぞー！」

拓海はそう言ってアキラ達に紙皿に盛った「はんを手渡し、アキラ達は「はんを一口するとまたまた顔を変えた。

アキラ

「つまーこの「はんも今まで食つたどの米よりも美味しいー！」

真理谷

「普通の「コシヒカリ」の三倍は美味しいこの米はー！」

拓海

「さつき焼いた肉はある所でもうつた『ガララワ』つてワーメでそつちはEG米と呼ばれる米だ。おかわり自由だから好きなだけ食べよ」

夏奈子

「ワニ肉！？これがですか！全然ワニ肉には思えない味ですよこれ！」

真理谷

「それにEG米だと？聞いたことのない品種だな。どこの国のお物なんだ？」

アキラ

「そんなこといいじゃねえか！拓海さん！おわり！」

拓海

「へいへいーちょっと待つてみよー。」

そつまつて拓海はアキラに2杯目を盛り、渡して自分も食べ始めてた。

翌朝。あの後に皆満腹になりそのまま熟睡した。そして、一番に起きた拓海は夏奈子がいないことに気づいた。

拓海

「夏奈子さんがいないー・まさか、襲われたのか！？」

拓海はそつまつて飛び上がり、夏奈子を探すため水辺付近を探し始めた。

拓海

「夏奈子さん……どうしたんだ……返事をしつづけ……夏奈子……あ」

夏奈子

「あ……」

ちゅうど水が溜まつてこむ場所に着くとそこには水浴びをしていた夏奈子がいた……全裸で。

拓海

「わ、悪い！」

夏奈子

「わわ……！」

拓海はすぐやめ声の影に隠れ、夏奈子はすぐして水の中に体を隠す。

夏奈子

「あ……あのどうかしましたか？／＼／＼」

拓海

「い、いや……いきなり夏奈子さんがどこかに消えたからもしかしたら襲われたのかと思って探しに来たんですけど……／＼／＼」

拓海は夏奈子の裸姿をモロに見てしまって思い出したのか顔を真っ赤にしながら言つた。

夏奈子

「あ、あの。昨日はひどい事言つて……取り乱してやつて」めんなさい

拓海

「謝りないで良いよ。今この事態で取り乱さない奴はないから……でも、安心してくれ。絶対にこの島から出る方法は必ずあるから、だから諦めないでくれ」

夏奈子

「如月くん……」

拓海

「そして、何があつても絶対にみんなを守る。もちろん、夏奈子ちゃんも絶対に守つてあげるから……」

夏奈子

「え……／＼／＼」

拓海の言葉に夏奈子は顔を赤らめた。

夏奈子

（不思議……如月くんって仙石くんとは違つた意味でとても惹かれ  
る。それに……ど、どひこよひ……私、如月くんに惚れちゃつた……  
／＼／＼）

びつやう、拓海の優しさに夏奈子は惚れ込んだようだ。だが、一つ  
気になつたのがあった。

夏奈子

「とにかく、一つ気になることがあるんですか」

拓海

「ん? 何?」

夏奈子

「仙石くん達の前では言えなかつたんですが、如月くんは飛行機の乗客名簿には載つていなかつたんですけど、どうしてですか?」

夏奈子の言葉に拓海はヤバいと思い、頭を搔く。

拓海

「ええと…… あの2人には話さないでくれよ?」

夏奈子

「あ、はい! 大丈夫です! 私、絶対に誰にも喋りませんから!」

拓海

「わかつた…… 実は俺はこの世界の人間じやないんだ」

夏奈子

「……え、ええええええええ! ! !」

拓海の言葉に夏奈子はかなり驚いた。

夏奈子

「え、嘘! どうこいつ事ですか! ?」

拓海

「俺はこことは違う別の世界、言つなればパラレルワールドの世界から來た人間なんだ」

夏奈子

「 もうか、だから乗客名簿には載つていなかつたんだ」

拓海の言葉に夏奈子は納得していた。

夏奈子

「 でも、ありがとつ如月くん…今日も頑張りましょひねつ…」

拓海

「 ああ！頑張りつな…夏奈子さん…」

夏奈子

「 はい…」

」つして、拓海は決意を新たにした。フラグを一つ立てながらであるが……

### 第3話『発見』

あれからアキラ達を起こし、崖の上に登つた拓海達は遂に飛行機を発見し脱出シューターから入るが他の生存者はおらず、まだ探すが見つかったのはコクピットで息絶えた機長の死体だった。機長の死に泣いている夏奈子を拓海はなだめていると真理谷がアキラのクラスマートのビデオカメラを見つけ、拓海は夏奈子を2人に任せた後、使えるものが無いか探し始めた。

拓海

「さてと、なんか使えそうな物はないのかな?まあ使えそうなのはさつき向こうで見つけた医薬品しか無いけど」

拓海はさつきつて天井の方を探しているとある一つの部屋の前で止まつた。

拓海

「ん?なんかこの部屋から人の気配がするな。確か、仮眠室だよな……よし!」

拓海はボストンバックからキー・ピックを取り出し、仮眠室のロックを解除して中に入る。

拓海

「おおい!誰かいるかーー返事してくれ!」

???

「だ、誰?」

後ろから声が聞こえたので拓海は振り向くと仮眠ベッドの壁際で頭から布を被っていた少女『赤神りおん』がいた。

拓海

「あー怖がらないでくれー俺は如月拓海、君が赤神りおんだよなー？」

りおん

「は、はい。私が赤神りおんですが、何故私の名前を……？」

拓海

「君の事は「クピット」にいるアキラから聞いていたんだ」

りおん

「ツーー？ アキラくさんがいるんですか！」

拓海がアキラの名前を囁きとつおんは立ち上がって食いついてきた。

拓海

「ああ、今ビデオカメラの映像を見ていると思つから一緒に行くか」

りおん

「はーーー！」

そう言つて拓海はりおんと共にアキラ達のこる「クピット」へと向かつた。

オマケ

拓海

「とにかく、アキラの名前を出してかなり食いついていたけどもし

かして、つねんちやんってアキラの事が好きなのか?」

りおん

「へっ!——ちょっと、そんなんじゃ、なこですよ!——アキラく  
んとはあくまで幼なじみであつて……、——むう!——からかわないでく  
ださい!拓海さん!」

この時、拓海はつねんの慌てように脈ありだが素直じゃないなあと  
思いながら移動していたのだった。

## 第4話『冥府のH』

あれからつおんと一緒にアキラ達のいる「クピット」に着きアキラを見たりおんはそのまま一旦散にアキラに抱きつく。その際にりおんの思いを知っている拓海は一人を見ながら「ヤーヤ」としており、それに気づいたりおんは顔を真っ赤にしながら飛び退いた。そして、事情を聞くために一旦外に出た5人は機長を埋葬した後、座り込んで話始めた。

拓海

「……なるほど、つまりおんちゃんは機長が亡くなつた後閉じこもつたからその後のこととは知らないのか」

りおん

「はい。あーでも昨日おつきな地震がありましたよね！？」

アキラ

「アア？ 地震？ 何言つてんだ？ 地震なんてなかつたぜ？」

りおん

「ウソオ！ あつたよお。だつてあんなに揺れて……アキラくん寝てたんじゃないの！？」

真理谷

「僕も感じなかつたな……」

りおんの証言に3人は首を傾げる中、拓海だけは何かを考えるよう手を組んでいた。

夏奈子

「どうかしましたか、如月くん？」

拓海

「……みんな、今すぐに荷物を集めろ」

アキラ

「え？ 今すぐ？ ですか？」

拓海の言葉にアキラは首を傾げる。

拓海

「そうだ。荷物をまとめ次第すぐでもここから離れるぞ。下手に止まついたら危険だ」

りおん

「どうしてですか？ 此処より安全な所なんてないんですよ？」

拓海

「いや、完全に安全な所なんてこの島には存在しない。それに、俺の予想があつてこるのなら、りおんちゃんのいつ地震はもしかしたら巨大な動物の可能性がある」

夏奈子

「ええ！ 本当にですか！」

拓海の言葉に夏奈子は驚いていた。

真理谷

「確かに、如月の言つ通つなら」 『も安全の保証は無いな』

拓海

「その通り。あのビデオカメラに映っていたアンドリューサルクスと同様な哺乳類がいるとすれば下手に止まっているよりか移動した方が得策だ」

アキラ

「分かりました。とにかく急いでかき集めます！」

そう言ってアキラ達は急いで飛行機の中に入り始めた。そして拓海はそのまままるで何かを警戒するように回りを見渡していた。

あの後、荷物をまとめ終えた5人は飛行機から離れてジャングルを突き進んでいると突然、先頭を歩いていた拓海は歩を止めた。

アキラ

「どうしたんですか？急に歩くのを止めて？」

拓海

「……何時まで隠れていやがる？たつたと姿を現したりどうなんだ？」

真理谷

「如月、お前こんな時に何を——」

——クツ　ククツ　ククククク　よく気が付いたな　？——

突然聞こえてきた笑い声に拓海以外は驚いていた。

「…！？な…何？笑い声！？」

アキラ  
「だ……誰だ！？」

夏奈子

卷之二

「クク……此処にいるよ」

聞こえてきた方に全員見ると崖のある方に仮面を被つた学ランを羽織つた青年が現れた。

「やつと現れたな。お前は何者だ?」

ハ  
デ  
ス

「そうだな……ハヂス。冥府の王ハヂスとでも呼んでもらおうか……」

アキラ

「ハヂスだと？ テメエ、 ふざけてんのか！」

拓海

(なんだ……「イツから感じぬ」の違和感は……?)

アキラはハデスの名乗る青年にキレるが、拓海だけはハデスから違和感を感じていた。

りおん

「あなたも私たちと同じ中学の生徒だつたら私たちと協力しよう！」  
あなただつて帰りたいでしょう？」

ハデス

「いいや……貴様らはここで死ぬんだ」

夏奈子

「え……？」

真理谷

「何？」

ハデスの言葉に全員耳を疑つ。

ハデス

「貴様らだけじゃない。血祭りだ！学校のヤツら全員ーーー！」

アキラ

「ババカお前！そんなことできるわけねえだろーーー？」

ハデス

「それができるんだよ……何故なら以前の俺とは違ひのだ。クッ…  
ククッ…アーハッハッハッ！今の俺は最強の“悪”だ！この世界な  
ら好き放題……やりたいことが出来るーーー！」

拓海

「……なるほど、やっぱりお前だつたか……全くしぶとい奴だなあ  
前は……」

拓海はため息をはきながらもう一つ言つた。

アキラ

「え？ 拓海さん、あいつのことと知つていろんですか？」

拓海

「正確には、あいつに取り憑いている奴をな……」

りおん

「あいつ……」

夏奈子

「取り憑いている……？」

真理谷

「それは一体どうこう事だ？」

拓海の言葉に全員首を傾げる。

拓海

「どうやって生き返つたんだよ。ええ？ “ネガタロス”！」

ハデス

「……ククク…やはり氣付くか！ 如月拓海！」

そうハデスが言つと、突然拓海達の目の前に『モールイマジン』が  
1体現れた。

アキラ

「うわっ…何だよ…あれ…」

ハヂス

「今日は顔見せだけだ。次に会つ時は、あの時の怨みを晴らすから覚悟しておけ…」

そう言つて青年に憑依したネガタロスはそのまま森の奥へと消えていった。

モールイマジン

「ああてとあ……ハヂス様の『』命令通り、貴様らを血祭りにしてやるぜ…」

真理谷

「何なんだ！あの怪物は…？あんな生物は図鑑には載つていないぞ！」

夏奈子

「ど、どひょい…このままじゃ…」

拓海

「……アキラ、3人と一緒に下がれ。アイツの相手は俺がする」

アキラ

「へっ…？ちよつ…相手は怪物なんですよ…？」「拓海さんでも…」

拓海

「大丈夫！ これでも俺、鍛えているから！」

そう言ってアキラ達を下がらした拓海はボストンバックから前の世界で貰った電王のベルトを取り出し、ボストンバックをアキラ達のいる方に投げた後、腰に巻き付けると不思議なメロディーが流れ、拓海はバスを持ち構える。

拓海

「變臭！」也行！

## 『ストライケフォーム』

拓海がベルトにパスを通した瞬間、拓海の体をプラットフォームが包み込み、次に体に赤色のアーマーが装着していき、拓海は仮面ライダー電王に変身する。現在の姿は知り合いのイマジン『モモタロス』が憑依時のソードフォームをモデルにした拓海専用のフォーム『ストライクフォーム』である。

アキラ

り  
お  
ん

「も……もしかしてっ！」

夏奈子

「拓海さんって……まさかあの都市伝説のつ！」

真理谷

「仮面ライダーだったのか!? まさかあれは本当だったのか!?」

拓海

「まあ、そういうわけだから任せやー。」

そうアキラ達に言った後、拓海は左右の腰にあるテンガツシャーを組み合わせ右手にナイフモード、左手にガンモードで持ち、モールイメージに向かって走り出す。

モールイメージ

「喰らえッ！」

突っ込んで来た拓海に向かってモールイメージは右手の爪を振り下ろすが、それを拓海は右手のテンガツシャー（ナイフモード）で受け止め、左手のテンガツシャー（ガンモード）でモールイメージの腹に打ち込む。

モールイメージ

「グハッ！？」

電王

「ふっ！」

ザンッ！

モールイメージ

「グワッ！？」

更に攻撃の緩めず、拓海はそのままテンガツシャーで斬り、撃つを繰り返す。モールイメージは反撃をするが、無駄のない動きで避けカウンターを喰らわせる。

電王

「「イツでトドメだッ。」

そう言って拓海はもう一度パスを取り出し、ベルトにかざした。

フルチャージ

「うう、ベルトを通してエネルギーが両手のデンガツシャーに送られる。そして、拓海は左手のガンモードをモールドマジンに打ち込む。

バシュンツ！

モールイマジン

キッ！？か  
体か……動かなし……！？

撃ち込まれたモールイマジンは体を固定され、そのまま拓海は突っ込んで右手のナイフモードですれ違ひ様に切り裂いた。

ザンツ！

モールイマジン

ギツ！？ギヤアアアアアアアア！？

そうモールイマジンが叫びと共に爆発し、それを確認した後拓海はベルトを取り変身を解除する。

拓海

（なんでネガタロスがこの世界で生き返ったのか知らないが、このまま放置する訳にはいかない。今度こそ完璧に倒してやるぜー。）

そう拓海は心に決意した。その後、アキラ達から質問攻めになつたのは言つまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2597ba/>

エデンの檻～次元の旅人が来た世界～

2012年1月10日21時46分発行